

## 筑波大生よ、教養ある情熱人たれ

古田博司  
社会科学系教授

### 1. 心がけていること

筑波大学に赴任した当時から、選択科目の東洋政治思想という講義を担当している。3年目あたりから学生が増え続けてきたが、最近では履修者がようやく200名程度で落ち着いてきた。講義棟は一学日棟の大教室を割り当ててもらっている。

工夫していることは別にないが、知識・教養・情熱の3箇条をいつも心に留めている。寝ている学生はほとんどいない。なぜかと言えば、私が大声で話し続けているため、うるさくて寝られないそうである。教壇の上を縦横無尽に動き、いつも学生たちの目を見つめている。400の瞳もこちらを見つめている。ぶつかりあって火花も散りそうだ。

「東洋政治思想」という地味な科目で、なぜそんなことになっているのかと、よく他の先生方から聞かれる。事実その通り、直接世の中に役立つような話はあま

りしていない。むしろ、役に立つこと、得なことばかり追っていると、自分たちが世の中に役に立たないのではないかと悩み、無用な陥穽に落ち込むと教えている。学問というのは広大な役に立たないことの上に成り立っている。有用なのはその上澄みみたいなものだ。そう語りかける。「地を這うものになるな」「鳥瞰し、俯瞰せよ」と実に大時代的に、劇中のように学生たちに向かい、大きな志を喚起する。教育理念は、「教養ある情熱人たれ」である。

しかし講義内容は、ごくごくおとなしいものだ。去年の例では、「東アジア政治の思想と行動」というテーマで、日本の東アジア認識、欧化と国粋、東アジア認識の三基軸構造、東アジア・イデオロギーなど東アジアの政治思想全般に亘って講義した。今年は、北朝鮮の事件が多かったので、北朝鮮の体制と思想教化について主に解説した。内容は隔年で、理

論編のⅠと実践編のⅡに分けている。若干システマチックなのは講義の骨格を整えてから肉付けをしたいからである。

情熱が入りすぎて時々脱線してしまうこともある。最近では、暗い世相で犯罪なども多く、かつて盤石であった日本国家の安定感が、今は失われてしまった。ふと思いついて道徳論を振ってみると、にわかには学生たちの目が輝いた。道徳論も思想の講義にとっては重要なテーマである。しかし昔ではそれは学生たちのあくびを誘ったものだった。何か大きな社会的変化が起きたに違いない。カントの定言命法からごくオーソドックスに道徳の話を起こすと、あれあれ不思議、以前とは学生たちの食いつき方がちがう。真剣そのものなのだ。彼らも今現在この問題で悩んでいることを初めて知った。

## 2. ちょっとだけ道徳を

思い返せば、私は大学での職を得るまでずいぶんと苦労した。分野が東アジアだし、専門が政治思想だし、研究テーマも地味すぎた。大学院を出ても職がなく、韓国に渡り、韓国の大学で日本語教師もした。なんと6年間も韓国にいたのだ。時代は80年代の前半で、反日ナショナリズムの全盛期だった。日本語を話していると、街角でじっとこちらを睨んで

いる御仁がいた。酒場で飲んでいても、日本人と分かれると遠くの方からマッチ箱が飛んできた。しかし根が楽天的なせいなのか、あまり苦にならず、韓国の透き通った青空ばかり見つめていた。雪が降ると嬉しくなって、大好きな西脇順三郎の詩を口ずさんでは早朝の街角を曲がったものである。「覆された宝石のような朝、なんびとか戸口にて誰かと囁く。それは神の生誕の日」……。

韓国で一番困ったことは、言葉ではなかった。6年間もいれば言葉などいつの間にかネイティブ並になるものである。巨大な障壁は、彼らの道徳だった。韓国語に熟達すればするほど、外国人としては扱ってくれなくなる。彼らの社会に深く入り込むようになると、今度は韓国の道徳に従えという要請が両肩に重くのしかかってきた。頭の中では日本の道徳が、美意識と絡まって存在している。これとあれとが競合するのである。道徳というものが、共同体の根底から発せられる義務の要請をまもっていることが説明ぬきで分かってしまう。

いわずもがな共同体の最大のものは現代では国家であるから、国が道徳を強調すると何かと嫌悪を感じる方も出てこられるだろう。ナショナリズムと結びつくと、東アジアの諸国家間のように自己の

正しさの押しつけ合いになりやすい。そういうことも前提で言っているのだが、やはり今日の日本の道徳状況は危機的といわねばならない。アブリオリなものを、論理ではない低級なものとして退けてきた、戦後日本の思潮のつけが、今ここにいたって急に回ってきたような気さえする。

### 3. 私の政治の講義

平成14年度の講義は北朝鮮の話で終始してしまった。テレビを見ても新聞を開いても、拉致事件や核・ミサイル問題ばかりだったので、大いに学生たちの関心を引いた。北朝鮮は1987年以来、カルト国家化している。これはわれわれ専門家の間では周知のことなのだが、テレビや新聞ではカルト国家に日本の首相が行ったというといかにもまずいので、どうも自主規制している節がある。講義では自主規制しても仕方がないので、どうして北朝鮮がカルト国家化したのかをビデオ等を交えて懇切に解説した。

ありていに言ってしまうえば、息子の金正日さんが父親の金日成さんから権力を世襲することになったとき、金正日さんには父親のカリスマをつく自信がなかった。そこで、お父さんを死んでも死なない神格に祭りあげ、自分がその教祖に

なった、ということである。そこで北朝鮮では、金日成さんは死んでいないことになっているので、今でも「故金日成主席」とは口が裂けても言わない。

拉致問題にしても、日本人だけが拉致されたわけではない。フランス人やイギリス人やレバノン人まで連れてきたということは、実は、北朝鮮の国家理念であるチュチュ思想で、チュチュ型の人間改造が可能かどうかを実験した可能性がある。

核問題にしても、1994年の米朝「合意枠組み」で凍結され、代わりに原子力利用の軽水炉が表向き提供されたことになっている。しかしKEDOが実際に現地を受け持っている軽水炉建設は、まだ地固めのコンクリート打ちしか終わっていないのだ。こんなことも絶対マスコミには出てこない。学外ではなかなか言わないことも、講義では興味深い話の一つとして取り上げている。

平成15年度の講義の概要は「東アジア政治の思想と行動」であり、日本イデオロギーを東アジアイデオロギーにビルト・インし、右翼・左翼・中道の政治行動を解明する、いわば理論編に戻る。この講義の成果をまとめて、1冊の本として刊行する計画も進めている。

最後に、私の授業には何故か単位に関

わりなく毎年聴きに來てくれる学生がいて、彼ら彼女らが教壇前の3列ほどを埋めてしまう。熱心な若者たちで、授業後も前にやってきて重要な問題に関し鋭い質問を投げかけてくるのだ。彼らは、私にとっては活性剤のようなもので、学問

に対する教師と学生の一体感を常に喚起してくれる。陽気な彼らに感謝しつつ、これからも自由な雰囲気で講義を続けていきたい。

(ふるたひろし 東アジア政治思想専攻)

